# まちづくりコツブック

How to make...

特定非営利活動法人 点空社

# まちづくり
# コツブック

特定非営利活動法人　点空社

# 目　次

紫波町で「協働のまちづくり」が始まって18年
これまでまちづくりに関わってきたひとたちは　その時その時に何を想い
何をなしてきたのだろう
教科書には載っていない「胸の内」
そんな　まちづくりのコツ聞いてみました


04　**いろいろな人がそれぞれの「足りない」を補い合える地域づくり**
古館まちづくり支援員　……水本　千恵子さん

06　**子どもを真ん中にして地域がつながり広がっていく**
チームあかいしこどもクラブ……岡市　久美子さん

08　**自分たちの困りごとは 住む人が自分事として捉える**
総務省 地域力創造アドバイザー　……宮崎　道名さん

10　**子ども自身が考え行動する「こみまち」は 大人の学びの場**
子どもを見守るまちづくり委員会事務局長……佐々木　勉さん

12　**人もＮＰＯも様々だから お互いを尊重して**
ＮＰＯ法人点空社代表……大吹　哲也さん

14 地域が良くなることで個人が暮らしやすくなる
役場まちづくり担当職員 …… 高橋　哲也さん

16 想いを話し合い 小さく始める
ＮＰＯ法人紫波さぷり代表 …… 細川　恵子さん

18 地域で継ぐ 住む人たちが安心して暮す地域づくり
佐比内「山ひだの会」代表 …… 山下　研悦さん

20 歴史や経験を聞き取り 大切なことを伝える場
紫波町観光案内人「しゃ・べーる」…… 小笠原　悦子さん

22 子育ても地域もそれぞれを尊重して寄り添う
紫波町ファミリーサポートセンター長 …… 佐藤　富美子さん

24 好きな事を地域で活躍する原動力に
紫波町民劇場 俳優兼裏方 …… 吉田　和希さん

26 内と外 人と人をつないで彩あるまちづくりへ
チーム音めぐみ代表 …… 鈴木　千佳子さん

28 余計なことをやらない町内会
古館14区町内会副会長 …… 石幡　信さん

*profile*

**水本　千恵子さん**

NPO 法人古館まちづくりの会の事務局
まちづくり支援員、前公民館指導員

平成 30 年に古館公民館が文部科学省の優良公民館表彰
令和 4 年に NPO 法人古館まちづくりの会が内閣府社会参加章を受章

# いろいろな人がそれぞれの「足りない」を補い合える地域づくり

## 地域との出会い

平成6年2月、マイホームを手に入れ紫波町に転入しました。来た当初は、仕事と家との往復で、スーパーも無く不便な地区だと感じていました。その後、職場を離れ家庭に入りましたが、近所との接点も無く、友人もできませんでした。そんな時、公民館で開催していた子育て支援をする「ひよこひろば」の存在を知り、飛び込んでいきました。そこで、地域の人と出会い、友達もでき、ボランティアスタッフになったのです。そこから地域と出会うことになり、その時の経験が今につながっているように思います。

## 皆さんの困りごとに寄りそい解決へ

現在は、古館地区のまちづくり支援員として住民のみなさんの声に耳を傾け、寄り添い、困りごとの解決につなげていく役割を担っています。たとえば、住民の方の困りごとを聞き、行政だったり、地域の方だったり、地域活動を行っている団体だったりにつなげることで解決の糸口を一緒に考えています。聞いてもらうことで孤独感から解放され、自分自身で解決に向かうこともあるようです。団体の困りごとでは、他の団体に仲

介することでお互いの課題を一緒に検討する機会となっています。

まちづくり支援員になる以前は、公民館指導員として地域に関わってきました。公民館では、人を知ることができ、色んな人と出会い、困りごとを話しあう中で、仲間ができて課題を話すことができます。個人の悩みと思っていたことが、実は地域の問題だったりして、解決の糸口が見えてきます。そんな経験をしていくうちに、公民館では困りごとが学びの場につながるけれど、学習だけではもう一歩先にでられない、と感じてきたのです。そのことで話し合いを重ね、まちづくりNPOの結成へとつながっていきました。

## 見えない成果を求めながら

全ての人が、同じ思いだったわけではなく、描くものが違います。いままでにない新しいものの形を見せていくのは難しいことです。たとえば、学童の事業では、子どもたちが活き活きしていくことで「素晴らしい」と言われても、関わっている内部の人たちにはわからないのです。多くの人に理解してもらうためにも、成果を数値化していきたいと感じています。表彰されたり新聞に掲載されたりしても、なかなか内部評価につながっていきません。

NPOに求められているのは、地域に役に立つことなのですが、関われば、関わるほど、地域が弱くなり、依存されるのは困ります。NPOが、やってあげた件数ではなく、やりたい人がやることでの成果が見えて欲しいと思うのです。

これからは、ボランティアしたい人や地域に関心のある人などを取り込んでいきながら、若い人、弱い人が声を出せる地域の合意形成のシステムをつくっていきたいと思います。わかっているようでわかってなかったことですが、すばらしい力や知恵を持った若い人達の活躍を阻んでいるのは、年配者の年功序列的な考え方にある指導方法や行動方法だと考えていました。ところが、若い人だけのチームでは、かえって機能しないことも分かってきました。いろいろな年代の人が入ることで、力がでてくるのです。地域は、様々な年代や考えの人たちで構成されています。それぞれの足りない部分を補いながら住みやすい地域を創っていきたいと思います。

*profile*

**岡市　久美子さん**

チームあかいし事務局、ＮＰＯ法人点空社常務理事、赤石みちくさ学童クラブ支援員補助、前赤石公民館指導員

平成 18 年頃から市民活動支援センターゆいっとサロンの運営に関わる。平行して「紫波第一中学校ゆうごうセミナー」「地域子ども教室推進事業赤石こどもクラブ」の企画やコーディネートを始める。

# 子どもを真ん中にして<br>地域がつながり広がっていく

## 大人も子どもも楽しむ場づくり

地域教育推進員として赤石小学校配置となり、まだまだ学校が地域に開かれているとは言えない頃でしたので、先生方や子どもたちが地域の方と接点が持てるよう考えて「赤石こどもクラブ」を企画しました。その翌年、平成16年度から文科省の地域子ども教室事業が始まり、地域子ども教室「赤石こどもクラブ」のコーディネーターとして活動することになりました。小学校の教室を会場に月2回土曜の午後、地域の人の得意を活かし大人と子どもが体験交流できる、まさに〈居場所〉の運営でした。科学、木工、手芸、パソコン、絵画、料理などのクラブに子どもがそれぞれ自由に参加、子どもたちの表情はキラキラでした。子どもたちに関わる地域の人も笑顔でした。長い継続の中で、学年の枠を超えて子どもたちが、そして地域の人や親御さん同士が気軽に話すようになっている様子が見え、『この場所は地域の人や親御さんが楽しいと感じ、子どもたちが楽しむところになっているんだ』と気づきました。

そして人と人のつながりに感謝するとともに、地域の人たちが子どもを大切に思う気

持ちを強く感じました。

## 課題を解決したいから みんなが話し協力し合う

時に大好評で子どもの参加者が多く、子ども達の安全の見守りが大変と思うこともありましたが「手伝うから」と言ってくれた方がきっかけでチームあかいしができました。

チームあかいしは、地域の人との体験活動を通し、子どもが自ら育っていく力を応援していこうという会です。赤石防災キャンプや、子どもフェスティバルでのおばけ屋敷など子どもが主体となって活動できるよう、スタッフは話し合いを重ねます。

行政の担当者、地域の方々、小学校との連絡や調整はとても大切で、子ども教室での経験の積み重ねを活かし関係を築いてきました。

赤石公民館の指導員を経て、現在は放課後学童支援員補助として小学生の放課後に、そして主に週末は「チームあかいしこどもクラブ」コーディネーターとして運営に関わっています。学校ではない集団生活の中での小学生と保護者の姿に触れて、今までとは別の目線で子どもの成長について考えるようになりました。チームあかいしこどもクラブでは、参加する子どもの安全を考えながら地域の方々と子どもたちが自由に楽しめる場を意識しています。

「自由で良いよ」というと実は子どもは戸惑うということを活動する中で気づきました。そんな時も声のかけ方などを考え、話し合っていく体制になっていきたいと思っています。

チームあかいしこどもクラブの活動の様子はSNSで発信していますが、楽しそうだな、行ってみようかなと思っていただけることを密かに期待しています。

子どもを真ん中にして地域がつながり、つながりが広がって、そこに来た子どもも大人も「楽しい場」をこれからもゆるやかに続けていきたいと思っています。

その中で大人も気づき、話し合う風土が生まれていくと良いなと思っています。

*profile*

**宮崎　道名さん**

総務省地域力創造アドバイザー、(株)カントリー・ラボ代表取締役、NPO 法人まちづくり学校監事、NPO 法人まちラボ監事、新潟大学教育支援員、東洋大学地域活性化研究所客員研究員

東京都生まれ 30 歳の時に新潟大学へ社会人入学。大学在学中から新潟、岩手にて、住民参加の場の運営、市民活動支援、人材育成に従事。東日本大震災を機に、小規模多機能自治の推進に注力。

# 自分たちの困りごとは<br>住む人が自分事として捉える

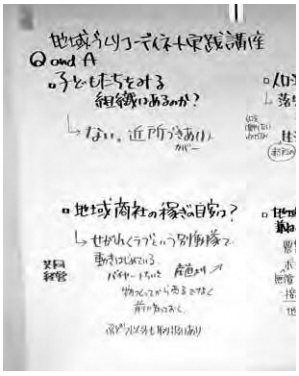
## 一緒に地域を歩き見る

地域が何かに困っているという声があって、初めて地域への関りが出てきます。困っていてにっちもさっちもいかないし、この先どうしていいのかわからないという話から始まるのがほとんどです。そうしたらその人たちが何を望んでいるのかを聞き、一緒に地域を歩き、見ることで、地域が本当に望む形に向けて伴走していくというのが、自分の仕事です。こちらから地域に何かを結び付けたいとか、例えば都市計画のような完成形のデザインがあるわけではなく、相手の話を聞いて、そこから何ができるか、何をしていくのかを一緒に考えていきます。クライアントから「地域住民のみんなに愛される公園を作って欲しい」とか「そのための関係性を地域内で作ってほしい」など、ふわっとした、ちょっと難しいオーダーも多いので、まずは現場に行くしかありません。

## 地域を耕すには土づくりから

自分は地域を耕す役割なのかもしれません。地域の土壌づくりみたいな感覚です。地域がちょっと回らなく

なってきたときには、土壌改良という意味もあるかもしれません。そこにしっかり時間をかけるので、「ワークショップを〇〇回行って、まとめを作る」というオーダーは少ないです。土壌はできているので、そんなに水とか肥料とかを与えなくても、しっかりと芽は出ます。もともとはそこにいる人たちの良い芽を探しに行くわけですから、結果的にワークショップをやる場合も、下準備がとても長いです。関係作りという土づくりをしてから、初回のワークショップに向かい、終わったらフォローに行く。その繰り返しです。



## プラスの連鎖でお互い尊重し資源を共有

動いている地域は、地域のつながりが強いです。住民も行政にもお互いをリスペクトしていて、地域が持っている知識や財産を共有している傾向があります。地域に住む人たちが地域を自分事として捉えると、プラスの連鎖が止まらなくなります。地域の人たちは誰かにやらされているわけではなく、自分たちの困りごとを自分たちで解決しようとしているので疲弊感などもあまり感じません。

## 地域のニーズがある限り関わっていきたい

この仕事をどこまでやれるかわかりませんが、オーダーがある限り、地域に関わっていきたいです。自分が関わらせていただいた後、地域がずっと動いているところも多いので、そういうところに引き続き一瞬でも携わることができたらということは励みにもなります。今、新しく様々な手法や人材が出てきています。次の世代への期待はめちゃめちゃあります。自分も勉強していて楽しいですし、一緒にやりたいなと思ううちは続けていくと思います。影響を与えてくれる人や地域の皆さんと共に。

*profile*

**佐々木　勉さん**

紫波町 CS コーディネーター、NPO 法人古館まちづくりの会副理事長、子どもを見守るまちづくり委員会事務局長

学校教員、途中約 12 年間社会教育行政に携わり参加型学習に出会う。NPO 法人古館まちづくりの会副理事長としても活躍中

# 子ども自身が考え行動する「こみまち」は大人の学びの場

## 「こみまち」のはじまり

こみまちは、古館地区の地区創造会議平成20年で出たテーマがきっかけ。地区創造会議で子どもに関わる理念として「元気で明るく健やかな子供を育む子育てに優しいまちだったらいいな」というテーマは出たが、親は参加してないし、具体的な手立てもない。親の意見も知りたいなとか、もう少し話し合いたいよねというところから、公民館が中心となり、私にも声をかけてもらいました。

その時のメンバー、地域関係団体とか、民生委員、子育て世代、行政関係の職員の人たちが集まって「じゃあ何かしようか」ということになり、子ども達を見守るまちづくりプロジェクト委員会が発足。大人が考えて決めていくのではなく、子どもが何を考えるかというところを話し合って「子育てしやすいではなく、子育ちしやすい環境がほしいよね」「子どもが育ちやすい環境って何だろう?」とみんなで相談したのが今から13年前。会の名前を決めなくてはならなくて「子どもを見守るまちづくり委員会」と決定。できる人ができることをやる。使命感からではなく、とりあえずこんなことやったら面白いんじゃないか、という

発想から始まりました。誰が主になってという事はなく、なんとなくやれる人がやってきた。「良いなぁ」が原動力。

## ワークショップとの出会い

当時の勤務先である岩手県生涯学習推進センターでワークショップに出会い、ショッキングでした。学校の教員として今までやってきた教えるではなくて、いわゆる参加者が主体ということが大事なのです。学校教員の時代からジレンマがあって、子どもを主体にとか、主体的に、と言っているけれど、自分が子どもたちを主体的に活動させられていないということや、その回答を自分の中でみつけたいと思っていたのかもしれません。ですから、ワークショップがこみまちの原点です。子どもたちの話し合いは子どもたちがやります。大人はそれを見守り、困ったことがあったら手助けします。子どもの感想と気づきがあり「またやりたい!」につながっていきます。

## 子どもたち自身が考えて決めていく

自分たちで考えていいんだという所にいくまで。子どもたちに気づかせたいから、まずは地域をつなげる事と、地域の講師とのつながりを深めていく事にしました。この講師の人たちとどんな行事ができるだろうと、子どもたちが考え決めていきます。積み重ねていくうちに「子ども達、全然考えられるよね」と、大人は見守になってきます。

実は、ここまでうまくいくとは思っていなかった。正直子どもたち次第の所もあって、自分では、期待はありましたが、やるのも考えるのも子どもたちだから　どうなるかという所が読めないし見えていかない。大切なのは、今日は何をするか。何に気づいてもらうか。「こうならなければならない」と言うことはない。サマーワークに手伝いに来てくれた中高生にも「あなたたちは何をやりたい?」と話し合ってから参加してもらいます。こみまちは私にとって、子どもと接することができる楽しい場所です。

*profile*

**大吹　哲也さん**

ＮＰＯ法人点空社代表理事、ＮＰＯ法人いわて連携復興センター事務局長

東京や盛岡での勤務を経て地元に戻り NPO として人や地域と関わるようになった。

# 人も NPO も様々だからお互いを尊重して

## まちづくりには色々なカタチがある

大学卒業後は東京、盛岡でマスメディア関係の仕事に従事した後、地元紫波町に戻り、紫波町役場の臨時職員として働きました。水道料金の集金に関わったことがきっかけで社会的に弱いとされる方が身近なところにもいることを知りました。一概に弱者と言っても色々なタイプや背景があり、支援のカタチもひとつでないことを感じました。

## 転機となった東日本大震災

平成22年ワークショップで関りのあったＮＰＯ法人風・波デザインに入職し、盛岡市のアイーナにある、岩手県内の市民活動拠点ＮＰＯ活動交流センターの運営に従事することになりました。そこで、多くの地域で活動している人たちとの出会いがありました。

翌年、東日本大震災が発生し、被災地には、全国から支援が多く集まりました。全国の支援を被災地につなぐ、中間的な受け皿の必要性を感じ、北上市にいわて連携復興センター を立ち上げ、そこに出向しました。毎日被災現場に行き、課題を共有し、課題解決に向けた取り組みを多

くの仲間たちと力を合わせて行いました。振り返ると、当時はひとつひとつこなすことが精一杯で考えて行動する余裕はなかったと思います。

## NPOの個性を活かした中間支援

復興や地域課題の解決には、NPOの力は不可欠だと思っています。そのためにNPOが持続して安定した運営ができるためにはどのようにしたらよいのか、体系的に理解したい、そして自分自身の取り組みの裏付けを持ちたいと思うようになり、大学院に社会人入学をしました。大学院で学んだことにより、これまでよりも少しだけ、物事をロジカルに見ることができるようになったと思います。

NPOが企業や行政との協働で事業を行う際など、それぞれの立ち位置を理解しなければ主従関係になってしまうこともあります。また行政、企業と話すとき、俯瞰した視点や、根拠や裏付けがないとわかってもらえないこともあるように思います。

今、様々なNPOが活動をしていますが、その組織毎にいろいろなカタチ、選択があり、課題や悩みも多種多様です。そのNPOがどういう風になりたいのかによって支援のカタチも変わります。それぞれのNPOの個性を生かして活動ができるように応援してあげたいです。

## 点空社としてのこれから

点空社では活動に関わってくれる人が楽しく、この場にきて良かったと思えるような場づくりを大切に考えています。関わりすぎて疲弊してしまうことが起きてしまわないように気遣いも必要かなと思っています。

地域活動が住民の皆さんに大きな負担にならないように、関わる方々に寄り添っていきたと思っています。人との関りは得意な方ではないですが、受け身体質だからこそ見えるものもあります。一人一人の個性を認め合い、仕事や学業をしながらもプラスαで地域に関わっていくことをできることを、これからの人たちに微力ながら伝えていけたらと思っています。

*profile*

**高橋　哲也さん**

紫波町役場職員、NPO 法人点空社理事、南日詰大神楽保存会事務局、紫波町農村青年クラブ役員

大学卒業後、紫波町役場に入庁。土木課や農林課で町内のいろいろな所を歩き平成 19 年に総務課協働支援室に配属。地区創造会議やコーディネーター養成講座の中でまちづくりの先駆けの人たちから実践を学ぶ。

# 地域が良くなることで個人が暮らしやすくなる

## 前例にとらわれず やってみる

農林課で学校給食に関わった時、地元産食材の自給率を上げるために、玉ネギに注目し、北海道と本州の栽培方法を学び、北海道に近い山屋地区なら冬場に利用可能でないかと考えました。北海道の品種は本州では種を販売できないルールがありましたが、試験栽培なら良いと許可が下りたので、協力してもらえる山屋地区の農家さんを探し、栽培を始めました。最初は小さくて思うようなものが取れませんでしたが、3年目には良い結果がでるようになりました。やったことがなくてもやってみなければ結果はわからないし、良い結果が出ればモチベーションにもつながります。

## 調整という役割は お互いを知ることから

給食センターと農家の間で小さな意見のぶつかりが起きていました。学校給食の食材には基準があり、農家は「基準が厳しい」と不満を持っていました。そこで、その理由が伝わるように調理風景を撮影して、農家に見せ、給食センターで使っている機械の構造上、規格が必要なことを見てもらいました。給食セン

ターにも規格の幅を少し持たせた、お互いが納得のいくようにわかりやすく理解してもらうための仲介をしました。実際に現場に出向き、話を聞き、妥協できないことと譲歩できる部分を見つけ出し、わかりやすく伝えるサポートを行うことも中間支援の役割かなと思っています。

## 地域にあったプランには下ごしらえ

地区創造会議でワークショップを仕掛ける時には、そこに暮らす人、関わりのある人や企業、歴史、文化など現場を調べ、統計などの基礎資料を集め、そこから地域を俯瞰して見て、重要なキーマンとなりそうな人や企業と話をし、根回ししていくことで地域の下ごしらえをしていきました。丁寧に準備を行うことで、地域が納得する結果につながると思います。

コーディネーターは、活動が生まれ順調な時はそっと見守りつつ、時々顔を出したり、新たな提案をしたりしながら関わり続けることが大切だと思います。

## 地域おこしからまちづくり

これまでのまちづくりは、イベント的な地域おこしが中心でしたが、これからはもっと生活に関わる部分にも注目が必要です。例えば農家や自営業のように、日中も地域を見守ってくれる方がいる一方、会社勤めでも休みなどには地域と関わる機会を増やすなど、住民が少しずつできることを積み重ねていくことで、将来に向けた地域の体力づくりになります。

これまで関わった所には、これからもずっとつながり続けたいと思います。地域が良くなれば個人も暮らしやすくなるという視点を持ちながら、自分が出来ることを提供したいと思います。

*profile*

**細川　恵子さん**

ＮＰＯ法人紫波さぷり代表、紫波の子育てを応援する会あれんと副会長

愛媛県大洲市出身。大学時代を岩手で過ごし、静岡に帰るが、結婚を機に紫波町に住む。

# 想いを話し合い 小さく始める

## 話せる仲間がいるから 前に進められる

障がいがあってもなくても楽しく暮らせる地域づくりをめざして活動を始めた紫波さぷり。子どものデイサービスから始まり、大人の日中活動の場やグループホーム、学童クラブなど活動が広がってきました。コンサートやシェアキッチンなど、地域の方とのつながる活動も継続して行うことができています。

もう19年目に入ったのですが、始める時は何も考えないでやるから、次どうしよう?っていうのはあまりなく、あっという間でした。大きな力になっているのは、2人の仲間がいることです。現場をやる人、ばふっとした想いの人、3人そろったらなんでもできますね。たとえば、経理的な事、総務、お金の事を相談できることで安心感があります。実現したい夢を話すと、「想いはわかるけどだれがやるの?」と抑えてくれたりしますが、たいがいは、方向性が一緒だから最終的にはわかってくれます。私ひとりでやれないって最初から思っているから、話をして、理解してもらって、今までやってこれました。

それでも、続けていく事ってなかなか難しいなと最近感じています。私たちの想いと、後から一緒に働く人たちとは想いは同じではないのは仕方がないことです。伝わらないときは気長に待ちます。伝わってくれるのを待つ意志はあるつもりです。そのための説得や説明は大事です。普段はあまり話してなくても、どうしても分かってほしい時は本質のことや想いの話を話すようにしています。そういうことが話せる人たちだから、話をすればわかってくれる。話せる関係になっておけば大丈夫だと思います。

## 小さいからこそ できることもある

世の中って社会情勢によって変わるから、いろいろ良い経験をしてきましたよね。

もともと大きくなく、小さい活動がいいなと思っていました。紫波町でやりたいということで、紫波という字を名前に付けようと思いました。最初から小さい規模でという思いもありました。規模感って本当に大切だと思います。小さい規模で働く人も少ないから兼務してしまうのですが、全体的な事がみえて視野を広くすることができます。制度的にはあまり兼務とか推奨されていなくて、報告など難しいところが悩みではありますが、関連してみることができて良い事が生まれるのです。小さい規模で身近なサービスができるから、国や県の事業は取らないし、規模を大きくする必要がなくて、話が伝わる役所が関わって力になってくれることで、かえって楽に自由に活動できます。そのことを行政に働きかけていくのも私たちの役目かもしれませんね。

## それぞれが やりたいことをやって いくことで広がる

今、子育てで悩んでいる保護者がどんどん増えている状況を肌で感じ、ペアレントトレーニングや講座、支援者対象の研修会などを開催し、広がりを見せています。医療、教育、保育、福祉、親などそれぞれの関係者で、同じ思いの人が集まって好きな事や、やりたいことをやっている。すごく良いなって思います。

これからのことを考えると何も決まってないし、人に押し付けるのは無理だから、1年1年、今何ができるか、何がやりたいか考えて、やれるうちはやっていきます。

*profile*

**山下　研悦さん**

前佐比内公民館長、山ひだの会代表

生まれも育ちも佐比内で現在に至る。盛岡商業高校卒業後、役場に就職。20 歳前、祭りの宵宮として演芸会の計画したのが地域づくり初めての参加。

# 地域で継ぐ
# 住む人たちが安心して暮す地域づくり

## 地域総出で元気なコミュニティが育っていった

昭和62年に佐比内小学校の新築記念事業として、金山太鼓の立ち上げに関わりました。翌年には、太鼓を中心に地域住民が一同に集い楽しむ機会を造ろうと金山まつりを企画。第1回を朴木金山跡地で行いましたが、始めたのは良いが資金がなく、ため池や河川の草刈り作業、はては北上市の土地改良区の水路の草刈りを行い資金作りをしました。

金山まつりは、地域の人々や帰省客、町内外からも集まり夏の一夜を楽しみます。

後に「岩手県・元気なコミュニティ１００選」に選ばれ、岩手県知事がわざわざ佐比内公民館に来られ、直接「選定書」を頂きました。以後も、地域を元気にしようと様々な取り組みをしてきました。

平成４年に佐比内産直ふる里センターが開店し、買い物客も多く訪れ良い成果が出てきました。会員もお客様との会話から商品の包装なども工夫したり、ぶどうの品種をより高価格で販売が出来る大粒種類が多く店頭に並ぶように工夫したりしました。次に出来たのが「レストランぶどうの樹」で地元の食材を使い、地元の人が地

元の料理を提供しています。味の良さが知られ、バイキング昼食等のアイディアからリピーターも増えました。産直の物づくりとして実施されたのが「かかしまつり」です。女性たちが頑張ってくれての試行錯誤。今年が終われば来年は何を造るか、と相談が始まり、年々熱くなって来ています。

## 地域のみんなで話す 地区創造会議から

平成19年、紫波町の地区創造会議が始まりました。この時、公民館長をしていたので、一番先に取り組みに手を挙げ、会議が終了後すぐに「山ひだの会」を立ち上げました。それがきっかけになってトレッキングを提案いたしました。佐比内は金の採れたところ、又隠れ切支丹の里でもあることから史跡を巡るトレッキングコースを2コース造ることにしました。平成21年、第1回目のトレッキングには盛岡の教会の皆さん、水沢のカトリック教会の神父さんなども参加し40人もの人が集まり、これがきっかけとなり町民劇場の「南部金山繁盛記」が上演されました。その後もトレッキングは実施され、産直紫波ふる里センターを起点とすることにより佐比内のブランド化が図られていきました。

## 地元人ばかりでなく、この地に来た人たちも暮らしていける

いま、深刻に考えなければならない事は、若い人達の未来を経験者が後押しすることです。若い人達の未来を少しでも明るいものにしたいと思ってます。農業に関わる人が冬場でも生活ができるようなハウス栽培などの設備コストや資金なども、地域の未来と共に考えなくてはならないと思っています。地元に生まれ、この地を離れることなく根を下ろしてきたので、地域のみんなと協力できたし、後押しもして貰ったことに感謝しています。これからは地域に残って頑張る人達、縁あってこの地に来た人たちが安心して暮らしていける地域づくりをしなければならないと思っています。

*profile*

**小笠原　悦子さん**

紫波町観光案内人「しゃ・べーる」、アマチュア講談の会「紫凛会」などの活動を継続しながら、公共交通しわまる号に関しての会議、議会審議員、NPO 法人古館まちづくりの会にも参加

# 歴史や経験を聞き取り 大切なことを伝える場

## むかしばなしをひとつ

昔話のストックは数多くあります。十八番をひとつお話ししましょう。「山の中に若い男が住んでいで帰ったら女の人が居で『軒下貸してけろ、夕方になったら帰るがら』『今晩だげだど』などと言ったけど男が朝起きたら朝ごはんができていて～」「おっかあのめん玉」と言う昔話です。方言の魅力を伝えたいと思います。

## 昔の暮らしを知ることから地域と関わる

都南地区手代森の生まれで、若い頃から青年会の幹部を務めるなど活発に活動をしてきました。釜石に嫁いだもののその後主人の仕事の都合で紫波に住みました。

思い出に残る活動として、NPO法人紫波みらい研究所が実施した「地域における伝承等聞き取り保存事業」の調査員です。平成16年8月～翌年1月まで日詰周辺に足しげく通い、町の有識者やお年寄りから昔のくらしの様子を聞き取り、写真や資料を収集してまとめる仕事に携わったことが現在につながるきっかけになりました。

## 昔の暮らしや地域の物語に惹かれて

その後、環境団体の方との出会いがご縁で、地域を日詰郡山駅に限定して昔の食べ物や日々の生活を記録として残す「懐かしの郡山駅」事業のお手伝いに係わることになりました。

その事業に携わる中、日詰の歴史研究家の方に声をかけていただき、習い町、鍛冶町の高齢者の集まりの場を紹介され、話を聞くことができました。戦時中「スベリヒユ」をゆでで食べたことやおいしくない「稲わらまんじゅう」を食べたこと等のお話をしてくださった最高齢102歳の方のことが今も記憶に残っています。

その後、紫波町内の史跡や観光にも興味を持ち、紫波町観光案内人「しゃ・べーる」の会の設立時に紫波町城山のガイドの仕方を学ぶ勉強会に参加しました。「しゃ・べーる」の会員として町内を巡るバスツアーに添乗したり、各地区で行われている「いこいの家」に呼んで貰い、その地区の歴史の話、紫波町の昔話、紙芝居等することが今の生きがいのひとつになっています。

## NPO会員としてまちづくりに

平成20年の頃、今、所属しているNPO法人点空社の前身であるNPO法人風・波デザインのメンバーとなり、コーディネーター養成講座や町内各地域のまちづくりワークショップなどに関わりました。最近ではしゃ・べーるの活動から進化した講談の会「紫凛会」にも所属し、講談師「おおむらさき」の芸名で町内のみならず花巻や北上までもお出かけする時もあります。台本は紫波の歴史物、昔話の物等、多種多様です。

オワリを決める日はいつか来るでしょうが、今、受け入れて下さっている方々が居る事に幸せを感じています。感謝山盛りです。

*profile*

**佐藤　富美子さん**

メジャーリーガー大谷翔平くんと同じ誕生日が自慢。
出身地青森県で、安住の地を古館に決めた。

紫波町ファミリーサポートセンター長、NPO法人ゆう・もあ・ねっと代表、主任児童委員紫波町社会教育委員、紫波第一中学校運営協議会委員、岩手県学校・家庭・地域の連携による教育支援活動促進委員

# 子育ても地域も それぞれを尊重して寄り添う

## 子どもに関わり続けるわけ

紫波町に転居し、情報収集したくて広報を見ていたところ、1週間無料のパソコン教室が紫波第三中学校で有る事を知り、そこにすぐ申し込みをしてパソコン操作を身に付けました。そこから自分の進みたい方向が何なのかが漠然とですが見えてきた気がします。その縁で赤石小学校、古館小学校図書館の本の整理に声がかかりました。これが、子どもと関わる仕事の第一歩でした。図書館に来る子ども達から、「この本ってどんな本？こういう時どんな本読んだら良い？」とか質問がきます。しかし、上手く答えれない事にショックを受け、これではいけないと奮起し、40代ではありましたが図書館司書の勉強のため富士大学に通いました。その後、「学校に登校できない子」「教室でじっとして居れない子」の支援のため、見前南小学校と徳田小学校で各3年間仕事をしたことが、最も大きな転機となった気がします。

## 学校でもない、家でもない、やさしい居場所つくり

平成14年、地域子ども教室の企画運営と、紫波一中ゆ

うごうセミナーの事業をきっかけに、「学校でもない、家でもない、やさしい居場所つくり」を目指して仲間と共に活動を開始しました。この活動を継続して数年後にＮＰＯ法人「ゆう・もあ・ねっと」を設立しました。この名称は「you more〈あなたともっと仲良く〉〈あなたの事をもっと知りたい〉〈ユーモアを忘れずに〉そしてネットワークを大切に」との思いから名付けました。平成23年に法人格を取得し、町からの委託を受けてオガールの中で「ゆいっとサロン」を運営しました。何かをはじめたいが、どうやったら良いか、どこに相談したら良いか等の相談窓口です。

## 子どもを中心にして人や地域をコーディネートしていく

現在やっていることは、紫波町ファミリーサポートセンター事業で、子育て中のパパやママの応援、子育てのお手伝いをお願いしたい人（依頼する人）と子育てのお手伝いをしたい人（援助する人）をつなげる仕事をしています。

また、中学生と得意分野の有る地域に住む方との交流等を目的とした活動の学社融合コーディネートも続けてやっていきたいことです。

子ども達にはその時々で色んな事を教えて貰います。子どもと関わる心地よさを知ってしまったので、これからもいろんな機会に出会った人たちに助けて頂きながら、子育て中の親御さんと子ども本人に寄り添い、活動を続けて行きたいと思います。

今後、コロナ禍が日常に戻ったら再開したいと思っていることは、震災を風化させないように、被災地を訪れ、被災地と被災地以外をつなげる交流活動をしてくことです。

*profile*

**吉田　和希さん**

紫波町民劇場俳優兼裏方

赤沢に生まれ、小さい頃から演劇に目覚めた。高校卒業後上京し、演劇を学ぶ。

# 好きな事を地域で活躍する原動力に

## 俳優を目指して上京 そして帰郷

農業を継がねばと思いつつ、心は演劇をしたい、声優をやりたいとの思いが段々強くなって行きました。これを一番理解してくれたのが祖父でした。社会勉強して来いと背中を押してくれたお陰で東京に向かいました。

演劇や声優になるには生易しいものではないと覚悟はしていたが、本当に大変な世界で、アルバイトしながら演劇養成所へ、まずは声の出し方から。その後小劇場に参加し、お芝居をしたりしてそこそこ売れて来て、演出もやったりしてスカウトされたこともありましたが、一歩前に出れない自分が居ました。それは芸能界に不信感があったからなのかも知れません。

「人に誇れるものが無い。人に勝てるものが無い。自分を前にだせ無い。先頭に立つ性格では無い」と自分を分析していました。そうこうしているうちに、祖父も歳とって来てたことと平成23年の東日本大震災があり、やはり跡継ぎは後継がねばと演劇に見切りをつけて帰って来ました。

## 地域でできる事を発見

平成24年紫波町民劇場第5回公演が行なわれると言う

事で、声を掛けて頂き出演させて貰ったのが、『～佐比内金山キリシタン物語～「南部金山繁盛記」』でした。ほとんど初めての人ばかり。また悪い性格がでて、引き気味になるが、皆に助けられて終わった時は喜びを実感。その後町民劇場に次々に出させて貰ったほか、演出もやらせて貰いました。町民劇場で色んな人とめぐり合い、地域の人達にも受け入れて貰い、少しづつ自分の心も開く事が出来てました。町民劇場の後、「劇団亜季」に入り、週2回練習していますが、コロナ禍の為ステージに立てずとっても寂しくしています。

我が家はぶどう農家なので、秋が一番忙しく、ぶどう農家は冬も仕事があります。ぶどうの樹の手入れ、棚作りなどは、今は若手グループを作り、町内外まで依頼が有ると動いています。勿論個人で頼まれて動くことも有ります。ようやく80％位ぶどう農家の事が体に入って来た、という感じです。

## 地域の一員となって自分を活かす

人には、それぞれの得意な事や活躍できる場があると思います。私も色んな地域の活動に参加させて貰い、地域の一員として少しは役に立って来たと思います。これからの夢は音楽活動、特に作曲に力を入れて行きたい。赤沢と言う環境の良い所、景色の良い所に居るので少しづつ準備はしています。希望するところは機会があったら、ギターを弾きながら歌をお披露目したいなーと思っています。今は、熱いものを持って活動している人達とめぐり逢えて、自分から何かをしようというように大分変化が出てきていると思います。後々には、小さい子供劇団とかやっても良いかなと思い始めています。その中には勿論、歌や楽器も交えて…。

*profile*

**鈴木　千佳子さん**

チーム音めぐみ代表、日詰６区自治公民館「鈴の音」管理者、商工女性部会員、日詰未来プロジェクト

紫波町日詰に生まれ育つ。父親の代からの稼業「すずけいでんき」を夫と共に切り盛りしている。

# 内と外　人と人をつないで彩（いろどり）あるまちづくりへ

## 外からのの視点で新しい地域づくり

かつて宿場町として栄えた日詰商店街は、店主の高齢化が進み空き店舗が増え、利用客が激減し、商店街に暮らす人たちにとっても不安な状態が続いていました。それに加えてお商店街以外の方々から、日詰商店街に対する批判の声がたくさん聞こえてきたことも辛い出来事でした。

平成28年に、日詰の実態調査事業や自発型のリノベーション事業などを通じて、まちづくりの様々な方々と出会い、新しい「まちづくり」の考え方に触れることができました。商店街の賑わいづくりや商店街を盛り上げる活動は、今までもずっとしてきていたのですが、ひとりひとりが地域とつながっている実感を持ち、安心して楽しく暮らすことができる地域づくりが必要だと感じるようになりました。私たちは、集まり話し合いを続け、女性が中心の「チーム音めぐみ」ができました。会員も活動もその時々でのぼんやりした組織ですが、私の大切な足場となっています。

## 思い出のある商店から彩あるまちへ

ヒノヤ呉服店さんが、かつ

ての店舗を日詰6区自治公民館「鈴の音」として、地域の人たちへ提供してくれました。その当時の思い入れのある地元の人たちは、店舗を昔のままに上手に生かす方法を考えましたが、私たちは、外部の方々にもどんどん利用してもらい、協力金という形で地域に還元していこうと提案しました。そして、地域の方々と一緒に、台所などを使いやすく整備することから少しずつ手を入れて整えて、解放感ある空間にしていきました。その時々には、自治会の役員会や総会で承認していただくことで、地域の皆さんの理解が頂けるようになりました。

現在は、和菓子づくりや陶芸教室、織物などの趣味を活かした活動や、子ども食堂の開催など自由に使える自己実現の場としても活用されるようになっています。

## まちにある文化と新しい暮らしをコーディネート

私の役割は、たとえば得意分野のある人と人の出会いを創ることです。やりたい事がある人に、場所や時間を紹介するなどのコーディネートや、人と人が会うきっかけをつくります。ジョイントできたらあとは勝手に活動が広がっていきます。

いままで関わってきた事の中で、在るものを活かすセンスや柔軟に考え行動していくことは、女性や若者に得意な人が多いと感じています。そのためには、ずっと街のために働いてきた重鎮の方や既存の組織などとの理解ある関係をつくる中間支援のような役割も大切だと思います。いままでである地域の方たちの集まりも大事にし、さらに、ヒト、モノ、コトが新たにまわる仕組みを考えていくことで、老若男女が集い、ひとりひとりが楽しく暮らす街になって欲しいと思います。

*profile*

**石幡　信さん**

ＮＰＯ法人古館まちづくりの会理事、ヤンチャークラブ所長、しゃ・べーる代表、観光交流協会理事、文化財調査員、紫波町史編纂委員、町内会副会長、古館地区教育振興運動会長、文化財関係団体代表

# 余計なことをやらない町内会

## 町内会はなくても問題なかった

私が暮らす地区の自治公民館は４つの行政区が含まれており、７００世帯以上で構成されています。この地区は地理のこともあって、普段の交流がしにくくなっています。自治公民館の活動はとても活発で、元々住んでいる住民のやり方に新しく転居してきた住民は戸惑うことも多くありました。隣の行政区では、早々に独自で町内会を作り、自治公民館活動と区の町内会を両立させていました。

自分が暮らす行政区では同じ方が30年以上も区長を引き受けてくれていたので、町内会がなくても特段困ることもなく、何人かの顔見知りがいる程度の付き合いで過ごしていました。

## 地域で起きた問題

ある時、区長が健康を理由に辞めたいと申し出ました。しかし次の区長の選出は困難で、なんとか２期目の区長までは輪番で決まったのですが、３期目は決まらない上、民生児童委員の推薦も重なり、当時の区長は途方に暮れていました。そのような状況が続き、住民の中から町内会を結成し、

自治公民館も2つに分離して、転居してきた住民で新たに組織しようという意見が出てきました。

## 女性達の声で大事なことに気が付いた

そこで、私が3期目の区長となり、町内会結成に向けて5人の男性メンバーで話合いを始めました。隣の町内会の会則を参考にしながら、話合いを重ね、少しずつメンバーも増えていきました。

地区の方々に理解を得るために班長に呼びかけると女性が多く集まりました。話を聞くと、女性で組織する団体への半強制的な活動に疲弊感を抱いていることがわかりました。女性の声から、余計なことは極力しない、役職を増やさないことも大切だと気付きました。

## 持続的な新しい町内会のカタチ

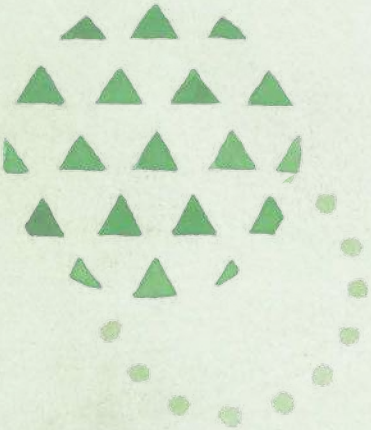
当区の町内会役員は、4名で、評議員として班での輪番と希望者は誰でも入れる仕組みにしています。その他、民生児童委員、健康推進委員、統計調査委員も参加できるようにしています。役員の任期は1年で、毎年4月には人事と役割をお知らせし、会議は2か月に1回、定期的に行っています。

町内会では行事を極力行わず、集まって困りごとについて解決に向けた話し合いをしています。例えば、子どもが減少し、子ども会で行ってきた公園清掃や資源回収の継続が難しくなっている課題が出ると、町内会として支援する仕組みを作りました。負担になっていた公園のトイレの清掃は、個人で受けてくれる方に町からの委託金に町内会費からも同額出してお願いすることにしたりと、住民の暮らしやすさに町内会ができることを話し合っています。

このことは、区長や民生児童委員の支援にもつながり、続けてきたことで町内会への理解や協力を得られるようになってきました。当区の町内会は余計なことをしないと決め、持続可能な町内会にしていきたいと思います。

# まちづくりコツブック

令和５年３月　発行

**発　行**　**紫波町**
〒 028-3392 岩手県紫波郡紫波町紫波中央駅前 2-3-1
TEL 019-672-2111 FAX 019-672-2311

**編　集**　**特定非営利活動法人 点空社**